

## デーヴィス報告書（1837）がボストン市議会や社会に及ぼした影響

——ヘイルの反対意見からホウズ学校での唱歌の実験教育に至る経緯を中心に——

長 島 真 人

（キーワード：唱歌，ボストン教育委員会，ボストン音楽アカデミー，ホウズ学校）

### はじめに

アメリカの唱歌教育は、1838年8月28日に、ボストンの公立学校で教えることが初めて認可された。この認可に至る背景には、ドイツやスイスで実践されていた唱歌教育の状況をアメリカに紹介したウッドブリッジ（Wm. C. Woodbridge, 1795～1845）や、具体的な教材や教授法の開発を試みたロウエル・メーソン（L. Mason, 1792～1872, 以下、メーソンと記す。）の活躍によって、組織的な唱歌の研修活動や教育活動が実践され、ボストン教育委員会が公立学校に唱歌教育を導入することに関して調査を行い、唱歌教育の有効性と実現可能性を容認し、公立学校での実験教育を提案するまでに至るといふ動向がみられた。特に、ウッドブリッジらの見解や私立学校で開始された唱歌教育の成果を調査し、その結果を明らかにしたデーヴィス（T. K. Davis）らの調査報告書（デーヴィス報告書）は、ボストン教育委員会やボストン市議会、そして、ボストンの一般市民に多大な影響を及ぼした。本論考は、このデーヴィス報告書が及ぼした影響に着目する。

ボストン教育委員会は、1837年9月19日に、このデーヴィス報告書を審議し、ボストンの四つの公立小学校で唱歌の実験教育を開始することを決議した。また、この実験教育のために必要とされる予算を得るために、ボストン市議会に提案することを決議した<sup>1)</sup>。このような経過を経て、唱歌教育を公立学校に導入する提案は、ボストン市議会の中で吟味されることになったが、ここでは意見がまとまらず、予算措置は実現されなかった。このような状況の中で、1837年11月1日に、ヨーロッパ視察旅行から帰国してきたメーソンが無償で実験教育を行うことを申し出たので、ボストン教育委員会は、1837年11月14日に、サウス・ボストンのホウズ学校（Hawes School）に限定して、実験教育の開始を決定した。

ボストン市議会が予算措置を否定した経緯については、多くの先行研究によると、詳細な史料に基づいた実証的な吟味が十分になされているとはいえない。たとえば、Birge は、1913年の Dickey の論考を引用して、「いくつかの理由で予算の拠出は実現されなかった」という記述にとどまっている<sup>2)</sup>。Rich は、ボストン音楽アカデミー（Boston Academy of Music, 以下、アカデミーと記す。）の第七年次報告書（1839）を引用しながら、「市議会から予算を獲得することには失敗した」という記述にとどまっている<sup>3)</sup>。その他の多くの先行研究も、この二つの先行研究が根拠となり、予算が獲得されなかった結果だけを紹介し、詳細な経緯については述べていない。しかし、Wilson は、ボストン市議会の議事録や当時の新聞で報道された記事を史料として取り上げ、特に、ボストン教育委員会の委員であったヘイル（N. Hale, 1784～1863）が、自らが編集している新聞紙上で唱歌教育をボストンの公立小学校に導入することに対して反対意見を述べていた事実を明らかにしている<sup>4)</sup>。そこで、本論考では、ボストン市議会の議事録とヘイルの記事に着目しながら、デーヴィス報告書が呼び起こしたヘイルの反対意見とこれに対する匿名の反論、そして、メーソンのホウズ学校での実験教育が実現されていった経緯に着目し、デーヴィス報告書が社会に及ぼした影響を明らかにしていく。

### 1. 実験教育の実施に至るボストン教育委員会とボストン市議会の動向

ボストンの教育委員会によるデーヴィス報告書の作成から具体的な実験教育の実施に至る歴史的な経緯を、アカデミーやメーソンの動向と関連づけながら年表に示すと、以下ようになる。

1836年6月

ボストン音楽アカデミーがボストン教育委員会に唱歌教育を公立学校に導入することを検討するように陳情書を提出した。

1836年 8月19日	ボストン教育委員会がボストン音楽アカデミーの陳情書に関する調査委員として、ゲイ、ミノット、アダムの三名を任命し、報告を依頼した。
1836年 (?)	ボストン市民による唱歌教育の検討を要請する署名入りの請願書が二通提出された。(1836年 8月19日から1837年 2月14の間に提出されたと推定される。)
1837年 1月	ボストン音楽アカデミーの会長であるエリオットがボストン市長となり、ボストン教育委員会の委員長も兼務することになった。
1837年 2月14日	ボストン教育委員会が唱歌教育の検討に関するボストン音楽アカデミーの陳情書とボストン市民による二つの請願書を吟味するために、調査委員として、デーヴィス、ロスロップ、フィールドの三名を任命した。
1837年 4月25日	メーソンがヨーロッパ視察旅行に出発した。
1837年 7月	デーヴィスらは、すでに唱歌教育を実施している私立学校にアンケート調査を依頼した。(三つの回答が現存している。)
1837年 8月24日	デーヴィスらは、唱歌教育に関する調査の結果を報告書としてまとめ、四つの公立小学校で唱歌の実験教育を開始するように提案した。
1837年 9月19日	ボストン教育委員会がデーヴィスらの提案を認可し、ボストン市議会に必要な予算措置の検討を申請することを決議した。また、教育長であるエリオットと教育委員のフィールド、ペリー、デーヴィス、ロスロップらを任命し、今後の詳細な計画を検討し、報告するように指示した。(2月に設定された検討委員会にエリオットとペリーが加わった。)
1837年 9月25日	ボストン市議会は、公教育に関する委員会、ボストン教育委員会のデーヴィスらの提案を吟味することを決定し、市長のエリオットと市議員のパーニー、ハイワード、ハンティングトンがこの委員会に加わることになった。
1837年10月 4日	ボストン教育委員会の委員であった、ヘイルが、自らが編集している <i>The Daily Advertiser and Patriot</i> という新聞紙上で唱歌教育の導入に対する反対意見を明らかにした。
1837年10月 5日	ヘイルの記事に対する匿名による反論が、同新聞紙上に掲載された。
1837年10月 9日	ボストン市議会の唱歌教育の実験の予算措置に関する検討委員会は、意見が二つに分かれ、賛成意見が過半数に満たなかったため、予算措置を否決した。
1837年11月 1日	メーソンがヨーロッパ視察旅行(4月25日発)から帰国した。
1837年11月14日	ボストン教育委員会は、メーソンが無償で実験教育を試みることを申し出たので、当初に予定されていた四つの小学校からサウス・ボストンのホーズ学校に限定し、この学校の視察委員会と唱歌教育の検討のために任命されていたデーヴィスらの委員会の監督の下で実験教育を開始することを決議した。
1837年11月15日	ヘイルが、 <i>The Daily Advertiser and Patriot</i> の紙上で、ボストン市議会とボストン教育委員会の見解が不揃いになっている状況の中で、メーソンが唱歌教育の実験に奉仕することを申し出たので、当教育委員会の監督の下で実験を開始することを紹介した。
1837年11月16日	<i>The Daily Advertiser and Patriot</i> の紙上で、ヘイルの報道を受けて、唱歌教育の実験に期待を寄せている匿名の記事が掲載された。

1835年にアカデミーの会長に就任したエリオット (S. A. Eliot, 1798~1862) は、1833年から1835年までの三年間、ボストン教育委員会の委員を務めていたが、翌年の1836年は、ボストン教育委員会から離れ、アカデミーの会長の立場から、ボストン教育委員会に唱歌の実験教育を公立小学校で実施するために調査を行う陳情書を提出した<sup>5)</sup>。これに応えるようにボストン教育委員会は、この年に、唱歌教育の調査を行う委員会を設定した。しかしながら、この委員会は具体的な報告を明らかにするまでには至らなかった。その後、一般市民からも署名が付された二通の嘆願書が提出された<sup>6)</sup>。このようなアカデミーやボストン市民からの要請を受けた1836年の動向を背景として、1837年1月にエリオットはボストン市長に選ばれ、ボストン教育委員会の委員長を兼務することになった。そこで、ボストン教育委員会は、この年の第二回目の会議日になる2月14日に、再度、唱歌教育の調査を行うためにデーヴィスら三名からなる委員会を設定し、調査報告書を明らかにするように依頼した<sup>7)</sup>。デーヴィスらは、8月24日の会議において、調査結果を報告し、実験教育の開始を提案した。

ボストン教育委員会は、同年9月19日の会議において、この報告書の内容を審議し、提案事項を承認した。この提案の中で、唱歌の実験教育は、ハノーヴァー通りのハンコック学校 (Hancock School 女子校) とノースベ

ネット通りのエリオット学校（Eliot School 男子校）、ワシントン通りのジョンソン学校（Johnson School 女子校）、サウス・ボストンのホウズ学校（男子校、女子校）の四つに限定された。また、この決議事項は、ボストン市議会に上程し、この計画を実行に移すために必要な歳出予算が充当されるように要求することを明らかにした。そして、すでに任命されていたデーヴィスら三名のほか、教育委員長であるエリオットと教育委員のペリー（M. Perry）が加わった五名の委員によって、今後の詳細な実験教育の計画を検討し、報告するように依頼した<sup>8)</sup>。ボストン市議会は、このボストン教育委員会の提案を受けて、同年9月25日に、ボストン教育委員会のデーヴィスらの提案を吟味することを決定し、公教育に関する委員会に、市長のエリオットと市会議員のバーニー（N. Burney）、ハイワード（J. H. Hayward）、ハンティングトン（T. Huntington）が加わった拡大委員会を設定した<sup>9)</sup>。この拡大委員会で、唱歌教育の実験に必要な予算措置が検討された。しかしながら、この拡大委員会では意見が二つに分かれ、賛成意見が過半数に満たなかったため、予算措置は否決された。このことに関して、ボストン市議会の9月25日の会議から二週間後に開催された10月9日の会議の議事録では、審議の結果が次のように述べられている<sup>10)</sup>。

当委員会は、二回会議を行った。この会議では、自由に討論が交わされた。唱歌教育の実験計画に関して委員が明らかにした意見は、均等に二つに分かれた。それぞれの学校に対して合計110ドルずつというように、膨大な金額が請求されたわけではないが、当委員会の中では、この実験教育の計画に賛同する意見が過半数を得ることができなかった。そこで、当委員会は、この問題をこれ以上検討することを取り下げるように要求する。

このような決議によって、唱歌の実験教育に関しては、ボストン教育委員会がこれを容認する一方で、ボストン市議会がこれを否認するという膠着状態に陥った。ここで、アカデミーは、組織的な行動をとらなかったが、この同年11月1日に、ヨーロッパ視察旅行から帰国したメーソン<sup>11)</sup>が、ボストン教育委員会に対して、無償で実験教育を試みることを個人的に申し出たので、ボストン教育委員会は、同年11月14日に、当初に予定されていた四つの小学校からサウス・ボストンのホウズ学校に限定し、ここでホウズ学校の視察委員会と唱歌の実験教育の計画のために任命されていたデーヴィスらの委員会の監督の下で実験教育を開始することを決議した<sup>12)</sup>。

以上のように、ボストン教育委員会は、デーヴィス報告書によって唱歌教育の必要性を明らかにし、公立学校での具体的な実験教育を構想し、予算措置をボストン市議会に要求した。しかし、10月9日のボストン市議会の否認によって、11月14日まで約五週間、唱歌の実験教育に関する新たな活動を展開することができなくなった。アカデミーも、ボストン教育委員会に唱歌教育の調査を依頼していたので、ボストン市議会の否認によって、公立学校でのさらなる運動を展開することができなくなった。このような膠着状態の中で、ヨーロッパ視察旅行から帰国したメーソンが無償で実験教育を試みることを個人的に申し出たので、この膠着状態は解除されることになった。しかしながら、ボストン市議会が予算措置を否認した状況や、メーソンがヨーロッパ視察旅行から11月1日に帰国して、約二週間の間に、ボストン教育委員会がホウズ学校を選び、ここでメーソンによる無償の実験教育が開始されるようになった状況に関しては、明確な史料が残されていない。そこで、以下、これらの問題に関して、周知的な情報から当時の状況の実相を検討していく。

## 2. ボストンの新聞紙上で展開された唱歌教育に関する論争

### (1) ヘイルの唱歌教育導入に関する反対意見

ボストン市議会は、9月25日にボストン教育委員会の提案を審議するために委員会を設定し、二回の検討作業を経て、二週間後の10月9日に予算措置を否認した。この間の出来事として、Wilson は、*The Daily Advertiser and Patriot*、という当時のボストンの新聞の編集者であり、1837年にボストン教育委員会の委員を務めていたヘイルが、10月3日に、同新聞紙上に唱歌教育に関する否定的な意見を掲載した事実を紹介している<sup>13)</sup>。以下、この情報に着目し、デーヴィスの報告書が唱歌教育の必要性を緻密な論理で紹介したにもかかわらず、否定的な見解が根強く存在していた状況を探っていく。

ヘイルの記事は、次のような言葉で始められている<sup>14)</sup>。

ボストン教育委員会が公立学校において正規の学課の中に唱歌を導入するという新しいアイデアを推奨して



きていることを、我々は遺憾に思う。学校のシステムが破壊されるという極めて深刻な恐れがあり、ここ数年間の間、ほとんどの学校で急速に際立っていた改善の流れが少なくとも阻止される恐れがある推奨なんて、とても考えられない。

ここで、ヘイルは、Iではなく We という主語を用いている。つまり、ヘイル自身の個人的な見解に留まるのではなく、多くの市民が唱歌教育に対して疑念を抱いているように示唆している。ヘイルは、この1837年にボストン教育委員会の委員を委嘱され、実験教育の対象には入っていなかったフランクリン学校の視察委員であると同時に、教科書の選書委員も務めていた<sup>15)</sup>。彼は、既成の学課である読み、書き、算に関わる検討作業に専念していた。したがって、彼が述べる「学校システム」は、読み、書き、算の指導システムであり、そのような教育の最適化を検討する立場に彼は立っていたと考えられる。ここで、彼は具体的に唱歌教育の導入に反対する論拠として、次の三つのことを指摘した<sup>16)</sup>。

第一に、ヘイルは、次に示すように、唱歌教育がすでに飽和状態になっている学習課題をさらに拡大させ、教師や生徒の既成の学業への注意をそらしてしまうことを問題にした。

既成の学課とは無関係な唱歌を新たに導入することは、すでにいる教師が教えるにせよ、新しい教師が教えるにせよ、ゆとりのない貴重な学習の時間を必ず奪うに違いない。時間を損失すること自体は、それほど深刻なことではない。そのことよりも、ここで提案されている唱歌のように、これまでの学課とは性格が異なるものを導入した結果、既成の学業への教師や生徒の注意をそらしてしまうことは極めて深刻である。

つまり、既成の読み、書き、算の学習の充実に向けての注意をそらしてしまうことを問題にしている。当時の学校が、グラマースクールとして、つまり、大学での本格的な学業を展開するために必要な基礎教育を行う機関として発展してきたことを考えると、当然の主張のようにも思える問題の指摘である。しかし、このような発想には、学術的な基礎スキルだけが意識され、子どもたちの学校生活の現実や、ここで必要とされている人間的な能力に着目する観点には、全くみられない。

第二に、ヘイルは、次に示すように、半数以上の子どもたちには唱歌を学ぶ能力が与えられていないにもかかわらず、すべての生徒たちを音楽家にしようとするのは意味のないことであり、このようなことに公的な出費を充当することは全く採算が合わないことを問題にしている。

学校のすべての子どもたちを音楽家にしようとするのは意味のないことであり、これを試みることは残忍なことである。半数以上の子どもたちには、歌唱技術の獲得を目指した適正な努力をするために必要とされる身体的な能力が与えられていない。そのような子どもたちに音楽の練習を課すことは、容認することができない残酷な行為である。多くの子どもたちを学校から追放することになるだろう。

ここでは、何を根拠として「半数以上の子どもには唱歌を学ぶ能力がない」と断定しているのかが明確に記述されていない。とはいえ、このような指摘は、当時のアメリカの社会では、唱歌を専門的な職能訓練としてとらえ、一方、唱歌を人間としての豊かさをめざす普通教育としてとらえることが困難な状況であったことが反映されている。

第三に、ヘイルは、次に示すように、唱歌を、ダンスと同様に、才芸の一つととらえ、このような才芸のために、コモンスクールの正規の学課として公的な出費が支給されることを問題にしている。

公的な出費によって、ダンスではなく音楽が教えられる理由が問われてきた。(中略)我々は、ダンスを公立学校に導入することを推奨することに納得するわけがない。才芸は非常に役に立ち、それ自体はふさわしいものであるが、音楽と同様に、才芸が、コモンスクールの正規の学課の一つとして公的な出費が支給されるのは、完全に場違いである。

音楽が才芸として盛んに行われていたことは、事実であるが、才芸として意味づけられる音楽と教科として意味づけられる音楽の違いに関して、このことを明確に納得させる論理が、当時はまだ十分でなかったことが確認される。つまり、社交界での嗜みとして意味づけられてきた才芸としての音楽と、学校教育において感情の教育

として意味づけられてきた教科としての音楽との違いが、当時の一般社会においては、まだ理解されていなかったということである。

このように、ヘイルの見解には、当時の学校で子どもたちに育まれるべき能力が学術的なスキルに傾いていたことや、音楽の能力に関して事実無根の偏狭な認識を抱いていたこと、才芸としての音楽と人間形成をめざす教科としての音楽との棲み分けが明確に認識されていなかったことが特徴としてみられた。デーヴィスらによって、この年の8月に唱歌教育に関する入念な調査報告がなされたにもかかわらず、唱歌教育に関する当時の一般的な受け止め方は、極めて厳しいものであったことが確認される提言である。このような提言が、ボストン市議会が唱歌の実験教育のための予算措置を検討しているわずか二週間という短い期間の中で、一般市民の意見を代表するようなボストンの新聞記事において、この時期を狙うかのようにして新聞紙上に紹介されたことは、ボストン市議会にも何らかの影響が生じたように思われる。ボストン教育委員会において、唱歌教育への関心が高まり、唱歌教育の必要性が容認されたにもかかわらず、この年の教育委員の一人であったヘイルが、このような見解に留まっていたのは、彼が、唱歌教育の調査を依頼する委員会の設定を決議した2月14日の会議や、デーヴィスらが唱歌教育の調査報告と実験教育の提案を行った8月26日の会議、デーヴィスらの提案を審議し、ボストン市議会に予算措置を要求することを決議した9月19日の会議に、いずれも欠席していることが一つの理由として考えられる<sup>17)</sup>。つまり、ヘイルは、唱歌教育の存在理由を審議する会議に一度も出席していなかったのである。とはいえ、このような記事が明らかにされたということは、当時のボストン市民には、唱歌教育の必要性を確認するだけの状況証拠が十分に得られていなかったということになる。論理だけでは一般市民を説得することが十分ではなかった状況が明らかになってくる。

## (2) ヘイルの反対意見に対する匿名の反論

ヘイルの見解に対して、反論を述べる記事が翌日の11月4日の同新聞に掲載された<sup>18)</sup>。この記事は匿名で投稿されているが、明らかにデーヴィス報告書の内容を踏まえた反論になっている。投稿者は、ヘイルの教育に関する基本的な認識に問題があることを指摘している。

第一に、すでに飽和状態になっている学習課題をさらに拡大させ、教師や生徒の既成の学業への注意をそらしてしまうという問題に対しては、次に示すように、ヘイルの学校教育に関する見解が従来の非常に狭い知育に限定されていることを指摘し、当時の学校教育の課題がこのような狭い見解では成り立たないことを指摘している。

我々の学校は、「教育」（原文はイタリックで表示）のために設けられている。（中略）仮に、この「教育」という言葉の意味の範囲が、かつて考えられていたように、文法と作文だけを含むものであるならば、今ではすべての人が必要であると叫んでいる多くのことがなされないままに放置されていくことになるであろう。仮に、教育が、有益な知識や性格、洗練された教養、優しさ、純粋な感性や感情や習慣によって精神を豊かにしていくような機能を排除するのなら、その教育は最終的には不完全なものになる。また、仮に、教育が子どもたちが一人前の人間に成長していくことを支援しないのであれば、そのような教育の機能は、不十分なものといえる。さらに、仮に、教育が言葉や事実を強制的に記憶させることに限定されるのであれば、そのような教育の機能は、ただ限定されているだけでなく、有害なものとなる。思考力は、単に知識を暗記する能力とは比べものにならないくらい価値があるが、このような思考力はなおざりにされ、低下している。たとえ、あらゆる知性が注意深く育まれたとしても、仮に、人は知的な頭脳と同時に感情を持っていて、この知的な頭脳と感情が相互に関係合っている、ということが忘れられているのであるならば、このような知性の育成は未熟で失敗に終わるに違いない。

教育が、ヘイルが考えているように、文法と作文だけを含むものに留まるものではなく、むしろ、有益な知識や性格、洗練された教養、優しさ、純粋な感性や感情や習慣によって精神を豊かにしていく機能を持ち、子どもたちの人間形成を支援するものであることが明らかにされている。また、従来の教育のように、言葉や事実を強制的に暗記させることよりも、思考力を育むことが必要であることが指摘され、その育成のためには、人が知的な頭脳と同時に感情を持ち、しかも、これらが相互に関係合っていることを念頭に置べきことが指摘されている。このような見解は、デーヴィス報告書にもみられた教育観であった<sup>19)</sup>。

第二に、半数以上の子どもたちには、唱歌を学ぶ能力が与えられていないにもかかわらず、すべての生徒たち

を音楽家にしようとするのは意味のないことであり、このようなことに公的な出費を充当することは全く採算が合わないという問題に対しては、次に示すように、唱歌教育を音楽家を養成する専門教育のようにとらえるのではなく、道徳的な教育を助長する普通教育として意味づけていることを明らかにし、反論している。

最近、教育改善がすばらしく進展していることは、明白な真実である。この教育改善は、知的な教育と同時に道徳的な教育にも目を向けている。人間の本性において道徳的な側面と知的な側面は統合されているので、この教育改善は、道徳的な教育と知的な教育とを結びつけてきた。(中略)音楽が学校において単なる知的な進歩を妨げるのではなく、むしろ支援するし、道徳的な教育に関しては、その影響が最も有益であることは疑う余地がない。

このように、学校教育が知的な教育に留まらず、道徳的な教育をも担っていく必要があることを明らかにしたうえで、唱歌が道徳的な教育において有益な効果をもたらすことを指摘している。このような指摘も、デーヴィス報告書において確認された。

第三に、唱歌を、ダンスと同様に、才芸の一つととらえ、このような才芸のために、コモンスクールの正規の学課として公的な出費が支給されるという問題に対しては、次に示すように、ダンスと唱歌を同じようにとらえるような論拠が見当たらないことを指摘し、唱歌をダンスと同じように才芸の一つとしてとらえる見解を否定している。

あなたは唱歌とダンスとの共通点を述べようとしているが、我々は、ダンスが、唱歌と同じように、思考や感情を鍛え、影響を及ぼすとは考えていない。したがって、当然ながら、あなたのように唱歌とダンスの共通点を見いだす論拠がみえない。

このような見解は、明らかにデーヴィス報告書を根拠にして述べられている。デーヴィス報告書においても、唱歌には知的な特性や道徳的な意図が込められているのに対して、ダンスにはそのような特性が見られないことが指摘されていた。

以上のように、ヘイルの唱歌教育の導入に関する反対意見への反論は、人間形成をめざす教育の本来的な特性から、ヘイルの認識の誤りを指摘し、唱歌が才芸ではなく、精神を豊かにし、道徳的な教育にとって有効なものであることを指摘しながら、唱歌を意味づけようとしていた。明らかに、デーヴィス報告書の内容が反映された反論である。しかしながら、デーヴィスの報告書がボストン教育委員会に報告され、審議され、その内容と実験教育に関する提案が承認されたにもかかわらず、ヘイルのような反対意見が明らかにされたという事実は、ボストンの一般市民に対して、論理的な説明を繰り返すだけでは効力がなかったことを示唆している。したがって、ボストン市議会において、唱歌の実験教育に必要な予算措置が実現されなかった原因も、このような人間形成をめざした教育の論理では説得することができない状況が存在していたということになる。このような状況を克服するためには、誰もが実感できるような唱歌教育の成果を証拠として提示する必要があった。したがって、メーソンらは、ボストン教育委員会が実験教育を容認した一方で、ボストン市議会が必要な予算措置を認可することができなかった膠着状態を何らかの方法で解決する必要に迫られていたことになる。

### 3. ヨーロッパ視察旅行から帰国したメーソンの動向

ボストン教育委員会やボストン市議会が唱歌の実験教育のために検討を行っていた1837年という極めて重大な時期に、メーソンは、4月25日から11月1日まで、ヨーロッパ視察旅行に出発した。彼は、イギリス、ドイツ、スイス、フランスに滞在し、音楽家や唱歌教師を訪問した<sup>20)</sup>。つまり、彼は、世俗音楽や教会音楽、学校音楽に関する様々な知見を得て帰国した。先に年表に示したように、彼は、ボストンを出発する前に、アカデミーがボストン教育委員会に唱歌教育の調査を要請する陳情書を提出したことや、1836年のボストン教育委員会が唱歌教育に関する調査委員会を設定したが具体的な報告がなされなかったこと、ボストン市民による唱歌教育の検討を要請する署名入りの請願書が二通提出され、1837年にアカデミーの会長であるエリオットがボストン市長に選ばれ、ボストン教育委員会の委員長を兼務することになったこと、この1837年のボストン教育委員会が唱歌教育に関する調査委員会を再び設定したことを確認していた。要するに、メーソンは、ボストン教育委員会の調査



が本格的に開始されることを確認した後に、ボストンを離れたことになる。

教会音楽家であり、唱歌教育の教材を開発し、教授法を検討していたメーソンは、教育行政の側で展開された唱歌教育の導入運動において、指導的な立場にあったとは考えられない。むしろ、アカデミーの会長であり、1837年から三年間はボストン市長であり、ボストン教育委員会の委員長であったエリオットが中心となって、この運動は展開されていた。また、デーヴィスらが調査報告を行い、実験教育を提案した一連の運動の経緯に関しても、メーソンの旅行中の日記の中に全く書き記されていないことから、帰国するまでは、メーソンが運動に全く関与していなかったことが確認される。

帰国後のメーソンの動向は、旅行中の日記が11月1日で終わらず、6日まで書き記されているので、若干の情報は得られるが、ここでも、ボストン教育委員会やボストン市議会の動向については、書き記されていない<sup>21)</sup>。日記によると、メーソンは、1日にボストンに帰宅し、家族と会う同時に、ボストンの近郊に位置するメドフィールドの生家にいる自分の両親に会い、翌日の2日の夕方にボストンの自宅に戻っていた。3日には、早々に、アカデミーで共同的な活動をしていた音楽家のウェッブ(G. J. Webb, 1803~1887)とエリオットに会おうとしたが、二人とも会えなかったことが書き記されている。その翌日の4日に、ウェッブと会うことができ、午前中を共に過ごしたことが書き記されている。Pembertonは、このメーソンの日記の記述から、メーソンは、この日にウェッブからボストン教育委員会とボストン市議会の動向に関する最初の情報を得たと推定している。さらに、メーソンは、日記が書き記されている最終日の6日に、「パーマー氏と、自室で朝を過ごした。」と書き記している。この人物は、Broylesの考察によると、ボストン音楽アカデミーの会計や通信委員を担当していたパーマー(J. A. Palmer, 1802~1872)と考えられている<sup>22)</sup>。仮にそうであるとするならば、このパーマーからも情報を得たと考えられる。状況に関して最も詳細な情報を得ているエリオットとは、この日記が書き残されている期間に会うことができているが、おそらく、7日以降に再会し、詳しい状況と膠着状態の解決に向けての相談が交わされたものと考えられる。Pembertonは、ボストン市議会が予算措置を認可することはできなかったが、ボストン教育委員会が唱歌教育の必要性を容認し、実験教育を実施することを認可していること、しかしながら、このような決議を行ったボストン教育委員会が12月に解散し、1838年1月から新たなボストン教育委員会が結成されることになるので、1837年の決議事項が維持されるかどうか不安定な状況になる心配があったことを状況証拠として、メーソンが結論を急いだものと推定している<sup>23)</sup>。ここで、このような状況をメーソンに詳細に伝えることができたのは、おそらく、エリオットであったであろうと推定される。いずれにしても、メーソンは、エリオットを中心とするボストン音楽アカデミーのメンバーとの相談の中で、自らが無償で実験教育を試みることを決断したものと推定される。

#### 4. 実験校に選ばれたホウズ学校の状況

ボストン教育委員会は、メーソンが無償で実験教育を行うことを明らかにしたことに応えて、11月14日の会議で、当初に計画されていた四つの公立学校からホウズ学校を選択し、この一校でメーソンによる唱歌の実験教育を開始することを決定した。メーソンが活動していたパークストリート教会やボストン音楽アカデミーの活動拠点であったオデオン劇場から比較的近距離にあったジョンソン学校やハンコック学校、エリオット学校が選ばれずに、遠距離になるサウス・ボストンのホウズ学校が選ばれたことに関して、ボストン教育委員会は何も明らかにしていないが、ホウズ学校の当時の状況から、この学校が実験教育に最も適していると考えられたことが推定される。その根拠としては、次のようなことが考えられる。

第一に、ホウズ学校は、五代目の校長であったページ(W. P. Page, 1790~1878)が1831年に赴任した頃、学校の子どもの学習態度が非常に悪化し、ページは翌年の1832年8月に学校を退職した。この後を継いだ六代目の校長のウォーカー(M. W. Walker, 1810~1838)は、学校の秩序を回復するために体罰を行使した。そのために、保護者から非難されるようになり、ボストン教育委員会においても調査が行われ、最終的にこのことが原因で1834年にボストン市内の別の公立学校に転勤させられた。この後を継いだ七代目の校長のハリントン(J. Harrington, Jr, 1813~1852)は、このように荒廃していたホウズ学校の子どものために道徳的な教育を施し、学校の秩序を立て直しに成功し、ボストン市内の優秀な学校にまで変容させた<sup>24)</sup>。このように、ホウズ学校は、ハリントンによって、知的な教育に留まらず、道徳的な教育にも目を向けている学校に成長していたということから、唱歌教育の実験にふさわしい学校に選ばれたと考えられる。

第二に、校長のハリントンは、唱歌教育に関心を持っていたので、ホウズ学校で唱歌教育の実験を行うよう

にボストン教育委員会に示唆していたように推定されている<sup>25)</sup>。このことは、道徳的な教育によって学校の秩序を改善したハリングトンの教育方針から考えると当然であったように考えられる。仮に、ハリングトンが積極的に唱歌教育の実験を容認する態度を示していなかったならば、メーソンやボストン教育委員会は、活動拠点であるダウントウンに近い地域で実験教育を行ったと考えられるからである。

これらのことから、ハウズ学校は、メーソンが唱歌教育の必要性や有益性を実証する上で、極めて好都合な学校として選択されたように推定される。

## おわりに

デーヴィス報告書は、学校教育が知的な教育に留まらず、感情の教育や道徳的な教育をも行う機関であることを明らかにした上で、唱歌教育の必要性を論理的に説得し、ボストン教育委員会において、唱歌の実験教育を開始することを認可させるまでに至った。しかしながら、ボストン市議会は、それほど高額な要求がなされたわけでもなかったのに、この実験教育のために必要とされる予算措置を否定し、膠着状態に陥らせた。このような状況の中で、1837年のボストン教育委員会の解散が迫っている11月に、メーソンが無償で実験教育を行うという決断を誘導した。ボストン市議会が予算措置を否定した背景には、ヘイルの反対意見のように、学校教育を知的な教育に限定してとらえる発想が根強く存在していた。したがって、デーヴィス報告書がボストン市議会や社会に及ぼした影響は、唱歌教育に対する理解を広めたというよりも、むしろ、唱歌教育の有用性を実証する具体的な証拠が求められていることを明白にしたことになる。そのような経緯で、メーソンは、無償で実験教育を行うことを決断したことになる。また、ここで、道徳的な教育によって成果を上げていたハウズ学校が実験校として選ばれたことは、唱歌の実験教育による望ましい成果を期待していたからであろうと推定される。このように、デーヴィス報告書は、学校教育における唱歌教育の存在理由に関する論理的な説得よりも、唱歌教育の必要性や実現可能性を実証する具体的な証拠を求める気運に拍車をかけたと考えられる。

## 注

- 1) Boston School Committee; *Records of School Committee of Boston, Minutes of 1837-1841*, p. 47.
- 2) Birge, E. B.; *History of Public School Music in the United States*, Oliver Ditson Company, 1928, p. 49., Dickey, F. M.; *The Early History of Public School Music*, Music Teachers National Association Proceedings, 1913.
- 3) Rich, A.; *Lowell Mason, Music Educator*, Ph. D. New York University, 1940, p. 175. Boston Academy of Music.; *Seventh Annual Report of the Boston Academy of Music. Read at the Anniversary Meeting, in the Odeon, July, 1839*. Boston: Printed by Perkins and Marvin, 1839, p. 11.
- 4) Wilson, B. D.; *A Documentary History of Music in the Public Schools of the City of Boston, 1830-1850, Volume I*. Ph. D., University of Michigan, 1973, p. 68. Wilson は、運動史的な考察によって、ヘイルの反対意見を紹介しているが、その内容についての詳細な考察は行っていない。
- 5) Boston School Committee; *Records of School Committee of Boston, Minutes of 1815-1836*, pp. 368-462. ボストン教育委員会の議事録によると、エリオットは、1833年に第7行政区の教育委員として名前が記され、1834年と1835年は、市会議員という立場で教育委員のメンバーの中に名前が記されている。しかし、1836年は、委員のメンバーの中に、エリオットの名前を確認することができない。おそらく、この事実は、ボストン音楽アカデミーの会長という立場から、ボストン教育委員会に唱歌教育の調査に関する陳情書を提出するために、エリオットが教育委員会の任務を辞退したものと推定される。そして、その翌年の1837年から1839年まで、エリオットは三年間ボストン市長に選出され、ボストン教育委員会の教育長を兼務することになり、行政的な立場から唱歌教育の調査や実験教育を実現させる可能性を得たことになる。エリオットらが提出した陳情書やボストン市民が送った署名の記された二通の嘆願書は、ボストン公共図書館に保存されている。
- 6) *Ibid.*, p. 491. ボストン教育委員会の議事録によると、1836年8月19日に、ゲイ (G. Gay) とマイノット (W. Minot), アダムス (Z. B. Adams) の三名が任命され、ボストン音楽アカデミーの陳情書を検討し、報告するように依頼されている。この議事録では、後のエリオットが教育委員長になった1837年の2月14日の議事録に示されているようなボストン市民による二通の嘆願書のことは記述されていない。このことから、ボストン音楽ア



カデミーの陳情書に応じてボストン教育委員会がゲイらによる唱歌教育の調査委員会を設定したにもかかわらず、具体的な調査報告がなされなかった状況を察して、ゲイらの調査委員会設定後にボストン市民による二通の陳情書は提出されたものと推定される。したがって、これら二通の嘆願書は、1836年8月19日から1837年2月14日までの間に提出されたものと推定される。そして、エリオットは、このような状況証拠に基づいて、教育委員長就任後の第二回目の会議となった1837年2月14日に、直ちにデーヴィスら三名の教育委員を任命し、再度、唱歌教育に関する調査と報告を依頼したことになる。

7) Boston School Committee; *Records of School Committee of Boston, Minutes of 1837-1841*, p. 8.

8) *Ibid.*, pp. 47-48.

9) Boston City Council.; *Minutes of a meeting of the Board of Aldermen, September 25, 1837*, pp. 307-308.

10) *Ibid.*, p. 324.

11) Mason, L.; *A Yankee Musician in Europe. The 1837 Journals of Lowell Mason. Edited with an Introduction by Michael Broyles, 1990*, UMI Research Press. ボストンアカデミーの陳情書に基づいて、ボストン教育委員会が唱歌教育に関する本格的な調査を展開し、デーヴィスらによって報告書が提出され、ボストン市議会が実験教育のための予算措置を検討していた時期に、メーソンは、4月25日から11月1日までヨーロッパの視察旅行に出ている。この旅行中に記されたメーソンの日記の手書き原稿は、三分冊になっている。現在は、エル大学の音楽図書室に保存されている。

12) Boston School Committee; *op. cit.*, *Minutes of 1837-1841*, p. 52.

13) Wilson, B. D.; *op. cit.*, p. 68.

14) Hale, N.; *The Daily Advertiser and Patriot. Tuesday, Oct. 3, 1837*.

15) Boston School Committee; *Ibid.*, *Minutes of 1815-1836, Minutes of 1837-1841*. ボストン教育委員会の議事録によると、ヘイルが教育委員会の委員を務めたのは、この1837年の一年間だけであったことが確認される。

16) Hale, N.; *op. cit.*

17) Boston School Committee; *Ibid.*, *Minutes of 1837-1841*, pp. 5-47. ボストン教育委員会の1837年の議事録によると、この年は、会議が17回開催されている。このうち、ヘイルは、9回欠席している。

18) Hale, N.; *op. cit.*, *Wednesday, Oct. 4, 1837*.

19) デーヴィス報告書の内容に関しては、次の二つの論考において詳しく紹介した。拙稿；「デーヴィス報告書（1837）にみられる音楽科教育の思想」、『音楽教育史研究』、第13号、音楽教育史学会、2011、pp. 69-80.、拙稿；「デーヴィス報告書（1837）にみられる啓蒙思想」、『音楽教育史研究』、第14号、音楽教育史学会、2012、pp. 49-58.

20) Mason, L.; *op. cit.*

21) Mason, L.; *Ibid.* p. 55., *Manuscript; Lowell Mason Journal, September 23, 1837-November 6, 1837*, pp. 54-55. (Music Library at Yale University.)

22) *Ibid.*, p. 184. Broyles の調査によると、パーマーは、ボストンの商人であり融資家、そして、メーソンとも縁があったボードウィンストリート教会の助祭（牧師の助手）をつとめていた。また、ボストン音楽アカデミーの年次報告書によると、彼は、アカデミーの創設から解散に至るまで常に役員職にあり、1833年から1836年までと1838年から1840年までは、アカデミーの会計をつとめていた。1837年は、通信委員をつとめていた。そして、1841年から1846年までは、相談員をつとめていた。常に、メーソンやエリオットと共に活動していたことが確認される。

23) Pemberton, C. A.; “Critical Days for Music in American Schools.” *Journal of Research of Music Education*, Vol.36, 1988, pp. 69-82

24) *The Hawes School Memorial. Containing an Account of five Re-unions of the Old Hawes School Boys' Association, and One Re-union of the Hawes School Girls' Association, and a Series of Biographical Sketches of the Old Masters; Together with a List of the Members of the Two Association, and a Reproduction of the Programs at Some of the Exhibitions.* Boston: David Clapp & Son, Printers, 1889, pp. 141-160.

25) *Ibid.*, p. 159.

## The Davis Report's Influence on the Boston City Council and Civil Society

— Movements from Hale's Objection to the Experiment of Singing Instruction at Hawes School —

NAGASHIMA Makoto

In 1830, at the American Institute of Instruction, Wm. C. Woodbridge introduced the context of School Music Education that had been practiced in countries like Germany and Switzerland and proposed that School Music Education should also be implemented in the United States. Based on the information shared by Woodbridge, L. Mason released publications such as the *Singing Book and Manual for Instruction in the Elements of Vocal Music*, thereby launching instructions of vocal music to children in church choir groups and at private schools. In 1833, the Boston Academy of Music was founded by people who were interested in School Music Education and Church Music, marking the beginning of organizational research and educational activities of instruction in vocal music. The Boston Academy of Music, in 1836, filed a memorial to the Boston School Committee requesting the study and consideration of School Music Education. In February 1837, the Boston School Committee set up a subcommittee to investigate the subject of introducing vocal music instruction into the public schools and commissioned T. Kemper Davis, S. K. Lothrop and J. Field to report on the results of the investigation. Upon the submission of the Davis Report by this subcommittee, careful discussion took place based on the report and a decision was reached to perform the experiment at four public schools. However, the Boston City Council did not approve the appropriation for the experiment, so Mason conducted the experimental education and revealed its achievements without compensation. As a result, the School Music Education in the U.S. was authorized for the first time in Boston public schools in August 28, 1838.

The present paper deliberated on the influence that the Davis Report had through a study of materials such as the Records of School Committee of Boston, the Minutes of a Meeting of the Board of Aldermen and newspaper articles. As a consequence, it clarified that the Davis Report not only rationally persuaded the *raison d'être* of vocal music instruction in schools, but also spurred the momentum to concretely demonstrate the importance and practicability of vocal music instruction.